

# 博 多 64

— 博多遺跡群第98次調査の概要 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第559集

1 9 9 8

福岡市教育委員会

## 序

福岡市博多区の北側、JR博多駅から博多港にかけての都心部は、かつて東アジア、とりわけ中国・朝鮮との貿易で繁栄した、中世都市「博多」の故地にあたります。現在でも中世以来の神社・仏閣が点在し、かつての都市の姿を偲ばせてくれています。また、その地下には、「博多」の遺跡が眠っています。

しかし、残念なことには、現在の都心部にあたるため、種々の開発行為による遺跡破壊は避けられません。福岡市教育委員会では、昭和57年以降、必要に応じて発掘調査を実施して、これに対応してまいりました。本書は、その第98次調査の成果を報告するものです。

本書が、市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理、報告まで、さまざまな面でご協力をいただいた有限会社合星ビルをはじめとする多くの方々に、心から感謝を表します。

平成十年三月三十一日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

## 例 言

1. 本章は、共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、博多遺跡群第98次調査（福岡市博多区中央服町2-22）の概要報告書である。
2. 本章の編集・執筆には、大庭康時があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は、大庭・土倉崇子（九州大学）が作成し、折茂由利が淨書した。
4. 本章の遺構実測図中および文中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図は、森本朝子・大浜菜緒・大庭康時が作成し、森本・井上涼子・上塘貴代子・折茂由利が製図した。出土銭は、大庭智子が鋳落とし・判読し、拓本を作成した。
6. 遺構写真・遺物写真は、大庭康時が撮影し、萩尾朱美が焼き付けした。
7. 遺物・記録類の整理には、今井民代・岡山良子・下山慎子・萩尾朱美・森寿恵・小田麻美子・深田みどりがあたった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

# 第一章 はじめに

## 1. 調査にいたる経過

平成7年12月29日、株式会社高木工務店より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区中呉服町2-22に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。申請地は、中世以来対外貿易で栄えた「博多」＝博多遺跡群の範囲に含まれていた。また、周辺でもこれまでたびたび発掘調査が実施されており、遺跡の存在は容易に推測できた。そこで、埋蔵文化財課では、まず試掘調査が必要と判断し、翌1月8日株式会社高木工務店に対しその旨申し入れを行った。

ただし、この時点では昭和46年に建てられた合戸ビルを解体中であり、その合間の1月26日解体作業中のバックホーの協力を得て、試掘調査を実施した。その結果中世の遺構の存在を確認したが、その遺存状態に不明確な部分があり、同年2月解体工事の終了を待って再度試掘調査をおこなった。

二度にわたる試掘調査で、現地表下2メートルから3.5メートルに遺構の存在が確認でき、発掘調査が必要と判断されるにいたった。ただし、申請地の東半分に関しては、既存の合戸ビルの地下室が掘られており、調査対象から除外する事になった。

発掘調査は、平成8年7月初めからとりかかる事とし、6月末まで比恵遺跡群第58次調査を担当していた大庭康時がこれに当たる事となった。そして、7月2日に調査機材を搬入、翌3日に地権者である合戸典子氏、窓口となつた鈴部産業株式会社酒井孝行氏・小熊照夫氏と現場で打ち合わせ、周辺に調査開始の挨拶に回り、同日より調査作業にとりかかった。

## 2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	合戸典子			
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田 英俊	
調査総括	同 埋蔵文化財課	課長	荒巻 輝勝	
	同 第二係長		山口 讓治	
調査指導	西南学院大学 磯望（自然地理学）			
調査庶務	同 第一係	西田 絹香（前任）		
		河野 淳美（現任）		
調査担当	同 第二係	大庭 康時		
調査作業	土倉崇子（九州大学） 石川君子 井口正愛 江越初代 大久保五枝 大久保学 大庭智子 河野恒子 岸本祥子 洪村和恵 清水明 杉山正孝 関加代子 関義種 曽根崎沼子 都野浩之 永隈和代 長田嘉造 龍丸勢津子 早川浩 宮崎タマ子 村崎祐子 吉田清			

遺跡調査番号	9618		遺跡略号	HKT-98	
調査地地番	博多区中呉服町2-22		分布地図番号	天神49	
開発面積	562.44m <sup>2</sup>	調査対象面積	200m <sup>2</sup>	調査実施面積	128.28m <sup>2</sup>
調査期間	1996年7月3日～8月2日				

### 3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに現代まで続く複合遺跡である。地理的には、玄界灘に面する博多湾岸に形成された砂丘上に位置し、西は博多川（那珂川）、東は江戸時代に開闢された石堂川（御笠川）、南は石堂川開削以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川（御笠川）によって両される。

本書では、紙数の制約から博多遺跡群の考古学的・歴史的環境について述べる余裕がないので、それに関しては福岡市教育委員会刊行の博多遺跡群関係の他の報告書をご参照願いたい。ここでは、本調査地点に関わる地形的・歴史的な要点をあげ、今回の発掘調査に関する課題を提示するにとどめる。

博多遺跡群の立地する砂丘は、大きくは内陸側の仮称博多浜と海側の「息浜」とに大別される。両者は自然地形上からだけではなく、歴史的にも古代以来の町場である博多浜と鎌倉時代



Fig. 1 博多遺跡群位置図 (1/25000)

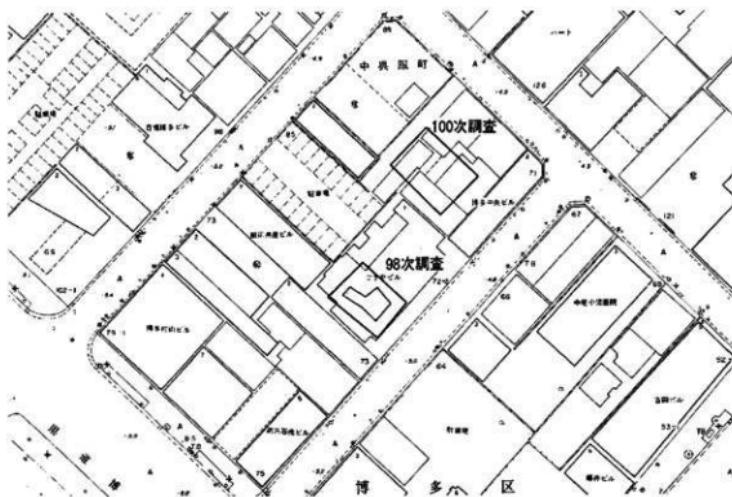


Fig. 2 第98次調査地点位置図 (1/1000)

以降の新地である「息浜」というふたつの都市空間に分かれていた。この両者をつなぐのが、12世紀初め以前に行われた埋立てで、現在の呉服町交差点付近で両砂丘はつなげられた。本調査地点は、この陸橋部分の東側で、「息浜」砂丘側の付け根付近に当たっている。陸橋の西側については、これまでに数次の調査例があり、小規模な埋立を繰り返しながらも、砂丘間の低地は埋め尽くされず、これが完全に埋め立てられるのは近世初頭であるということが明らかになってきた。それに対し、陸橋の東側の低地部分については、これまでに本格的な調査例はなく、本調査が初めてとなる。したがって、今回の調査では旧地形の復元・陸橋東側における砂丘間低地の埋立状況と「息浜」都市化の過程などを探る手がかりを得ることが、当初からの目的としてあげられた。

なお、これに関する本調査での成果については、第三章で触れる事にする。

## 第二章 発掘調査の記録

### 1. 発掘調査の方法

本調査地点には、まず表土部分にかつての合戸ビルを解体した際の荒乱層が厚く堆積していることが知られた。また、試掘調査の所見では、遺構面までが2メートル以上とかなり深いことが予想された。そこで、発掘調査に当たっては、まずバックホーを用いてこの搅乱部分を除去し、さらに引き続き安定した遺構検出面まで掘削することとした。なお、この過程で調査対象に絞り込んだ部分の北半分にかなり大きなコンクリート基礎が直立していることが確認され、この北半分を当面の調査対象からはずした(1区)。掘削に際しては、調査区周囲に土止めがなされていないことから、安全勾配の法面を作つて掘り下げるを得なかった。結果、掘り下げた下の面は、当初の調査対象面積よりもかなり狭くなってしまった。

1区は、現地表下3.5メートル前後で第1面を設定した。さらに砂層上面を第2面とし、それ以下についてはL字形にトレーニチを設定して遺構の有無と、砂層の堆積状況を確認した。

また、1区の調査壁面の観察から、第1面よりも上位に遺構面=生活面の遺存を確認した。そこで、バックホーによる掘り下げ時に調査対象からはずした北側半分について、コンクリート基礎を避けて、人力で掘削・調査を行つた(2区)。2区では、現地表下3メートルあたりで第1面を設定し、第4面までの調査を行つた。面の認定は整地面を基におこなつたが、必ずしも厳密に認定できない部分も見られ、その場合にはレベルを均す形で設定した。

調査した遺構には、遺構の種類に関わらずその検出順に遺構番号をつけた。遺構番号は、調査全体の通し番号である。また、遺構検出面から次の検出面までの掘り下げに際しては、上位の検出面を冠して、たとえば第2面からの掘り下げ中に出土した遺物は、「第2面下」として取り上げた。

以下、簡単に調査の経過を記す。

7月2日 調査機材搬入

7月3日 地権者・開発業者と現地打ち合わせ。隣接地に挨拶。

バックホーで表土掘削を開始する。掘削に立会した所見では、整地層はみられたが、全体に泥土質で遺構は見えなかつた。よつて、一気に地山砂層直上まで掘り下げるに至る。

7月4日 バックホーによる掘削終了。調査機材を追加して搬入、事務所・道具の片付け。

- 7月5日 1区の調査にとりかかる。
- 7月8日 昨日の雨のため、調査区間に積み上げた残土の山に亀裂が入り、崩落の危険が生じたため、急遽残土の一部を搬出することとする。
- 7月9日 現場作業は休みとし、残土搬出。
- 7月11日 第2面以下にトレーニング設定。
- 7月12日 トレーニングの土層について、西南学院大学の磯野先生にみていただく。
- 7月15日 2区の調査にとりかかる。
- 7月30日 2区調査作業終了。調査機材片付け。
- 8月1日 調査機材搬出。
- 8月2日 埋め戻し。博多遺跡群第98次調査終了。

## 2. 基本層序

本調査地点における層序は、おおまかには上から表土、擾乱、中近世包含層（=文化層）、地山基盤層（自然堆積層）とくくることができる。

中近世包含層は、整地層と生活行為の中で自然に堆積した土層とが見られる。前者は、砂質土・壤土・粘質土による互層で、これに焼土処理層や焼土層、炭・灰層が混じることがある。おおむね、きれいに水平方向に均された、単位の細かい堆積を示す。後者は、暗褐色や暗灰色の土層で、堆積に細かい単位はなく、しまりなく柔らかい。

本調査地点における基盤層は、河川性の砂層である。これについては、博多遺跡群の自然地形を復元する上で重要なことで、1区において第2面から下にL字形にトレーニングを設定して観察した。Fig. 4にその実測図を示す。また、西南学院大学の磯野氏にご指導いただいたので、以下に記す。

基盤砂層の堆積は、河口付近の堆積状況を示している。さらには砂の粒径の変化からみて、河口の淀みであった時期と、速い流れの時期が交互に繰り返された状態が見て取れる。砂層の上部近くにみられる炭粒を含んだ黒灰色土は、一時的に陥化した段階があったことを示している。

基盤砂層出土の遺物については19ページ、地形環境については25ページで検討する。

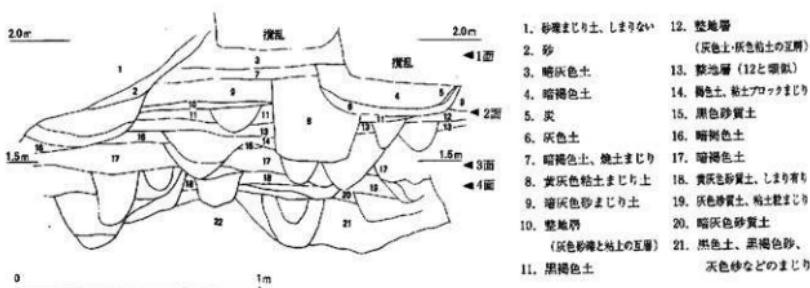


Fig. 3 2区西壁土層実測図 (1/20)

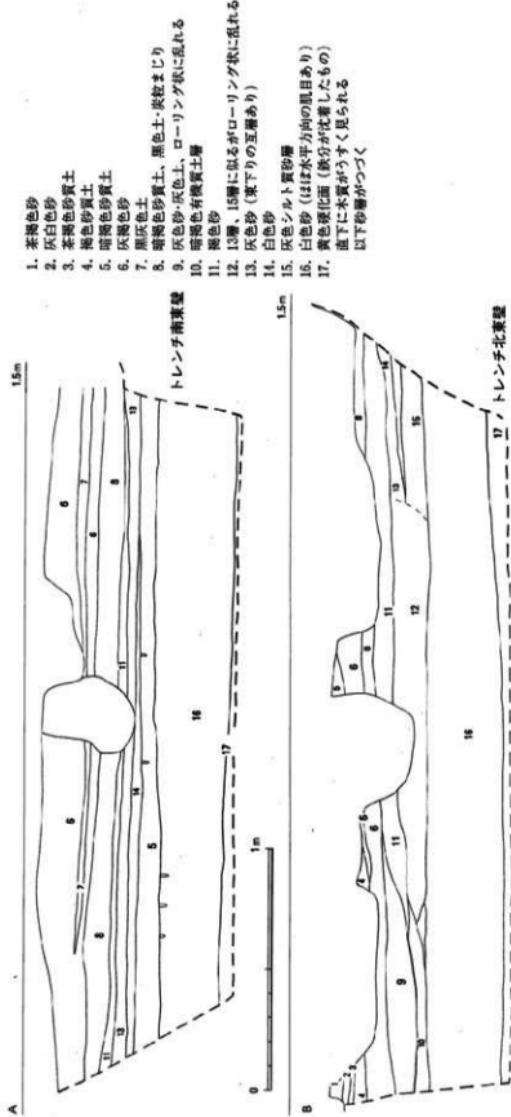


Fig. 3 第2面下トレンチ南東壁



Fig. 2 第4面下トレンチ南東壁 (西より)

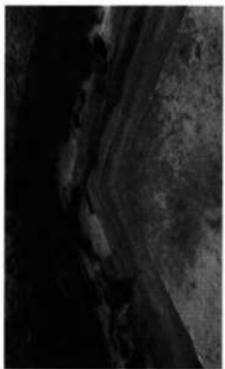


Fig. 1 第4面下トレンチ (西より)

### 3. 遺構と遺物

第98次調査で出土した遺構・遺物の内、比較的まとまりの良かったもの、現時点できれいと思われた遺物について、簡単に紹介する。なお、以下の記述は遺構検出面に従って行うが、1区と2区では面の設定にずれがあり対応しないため、あらためて統一し、検出標高の高い面から順次記した。したがって、第1面=2区第1面、第2面=2区第2面、第3面=1区第1面・2区第3面、第4面=1区第2面・2区第4面となる。

#### (1) 第1面

2区第1面がこれに当たる。現地表から3メートルほど掘り下げて設定した面で、標高2メートル前後をはかる。

土坑・柱穴・溝状遺構を検出した。178号遺構は、第1面よりも上位から掘り込まれている土坑で、近世に属する。174号遺構は、卵形を呈する土坑で、中国明代の白磁や瓦質土器のこね鉢などが出土しており、15世紀代におかれる。その他の遺構は、おおむね14世紀代と考えられ、第1面の年代も14世紀を考えて良いだろう。なお、177号遺構から瀬戸の入子皿が出土している。

175号遺構 (Fig. 6-1~4)

長軸56センチ、短軸52センチの卵形を呈する土坑で、検出面からの深さは38センチをはかる。

出土遺物の内、実測に耐えたものをFig. 6-1~4に示す。1・2は、土築器である。1は皿である。底部は回転糸切りで、板目圧

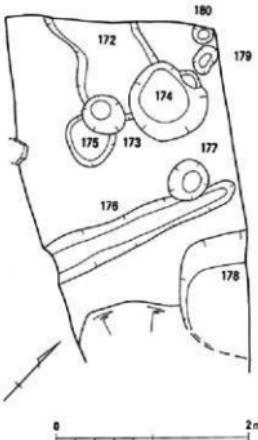


Fig. 5 第1面遺構平面図 (1/50)



Ph. 4 第1面 (南西より)

痕と見込みの静止なで調整が認められる。口径8.6センチ、器高1.1センチをはかる。2は、坏である。口縁部のみの破片で、口径は12.0センチとなる。3は、白磁碗である。脚は、高台際までかかる。4は、滑石の石錘である。石錘の破片を転用したので、鍋の脚の部分が残っている。

このほか、青磁（鍋蓮弁文碗）、陶器、土鍋などが出土している。

14世紀前半頃の廃棄土坑と考えられる。

#### 176号遺構 (Fig. 6-5~7)

溝状遺構である。検出面上での上端で最大幅45センチ、深さ19.4センチをはかる。調査区を横断しておらず、北東壁の際で止まっている。

Fig. 6-5・6は、青磁である。5は、同安窯系青磁の碗の体部片で、模描き雷光文の一部が認められる。6は、鍋蓮弁文の碗の口縁部破片である。7は、褐釉陶器の鉢である。口縁部の小片で、全面に茶褐色の釉が施される。

このほか、天目茶碗、備前陶器、瓦質土器壺鉢などの破片や鉄釘が出上している。

14世紀代の区西溝であろう。

#### 178号遺構 (Fig. 6-8~15)

調査区北東壁の際で検出した、大型の土坑である。壁面での土層観察から、かなり上から掘り込まれていることが確認できた。残念ながら、掘り込み面は搅乱されており、残っていなかった。

近世の遺物が小数出土しており、掘り込み面の高さから言っても近世以後の遺構であることは間違いないが、固化できたのはいずれも中世の遺物である。8~10は土師器、11・12は白磁碗、13は青磁碗、14は明染付碗である。14は見込みに花文、高台脇に圍線を染付する。15は銅製の笄である。15は、大きくS字形に曲げられている。

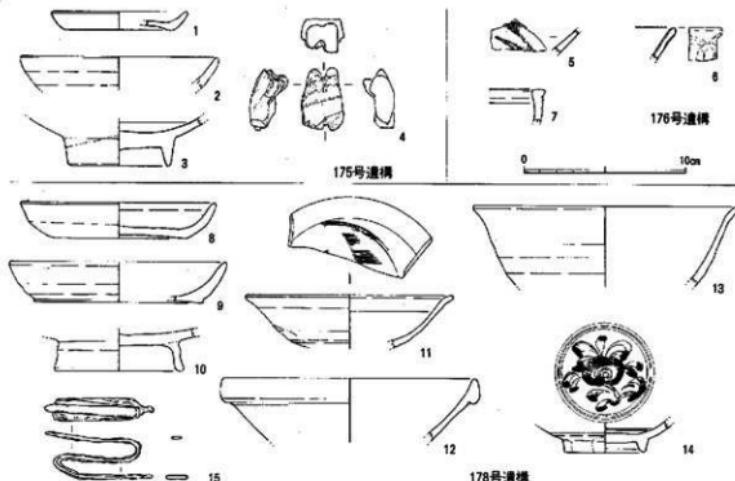


Fig. 6 175号・176号・178号遺構出土遺物実測図 (1/3)

## (2) 第2面

2区第2面に相当する。第1面から30センチ前後掘り下げた、標高1.7メートル前後で設定した遺構検出面である。

柱穴・土坑を調査した。柱穴では、比較的大振りな石を据えたものが見られた。2区南東半分に直線的な落ちとしてみた197号遺構は、わずかに掘り下げてみたところ整地土の変わり目を認めたものとされたので中止した。

13世紀後半の遺構(182, 186, 196号遺構)と12世紀後半～13世紀前半の遺構(185, 190, 193, 194号遺構)があり、第2面の年代としては、12世紀後半から13世紀前半にかかる時期と見たい。

### 185号遺構 (Fig. 8-1)

長径92センチ、短径60センチ、深さ29センチの土坑である。土器皿・壺(底部回転糸切り)、瓦器、白磁、青磁(同安窯系・龍泉窯系)、陶器などが出土した。Fig. 8-1は、褐釉陶器の鉢である。口縁部直下から下に施釉する。

12世紀後半から13世紀前半の廃棄土坑であろう。

### 186号遺構 (Fig. 8-2～4)

長径71センチ、短径58センチ、深さ43センチの土坑である。Fig. 8-2は龍泉窯系青磁碗、3・4は口ハゲの白磁皿である。この他、土器皿・壺(底部回転糸切り)、土鍋、東播系須恵器こね鉢が出土した。13世紀後半頃の廃棄土坑と考えられる。

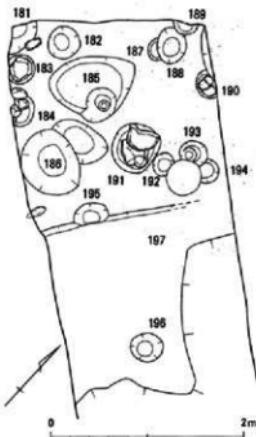


Fig. 7 第2面 遺構平面図 (1/50)



Ph. 5 第2面 (北東より)

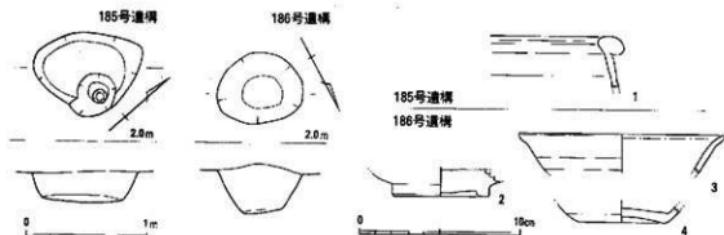


Fig. 8 185号・186号遺構実測図 (1/40)、出土遺物実測図 (1/3)

### (3) 第3面

1区第1面、2区第3面に当たる。第2面から20センチ程掘り下げた、標高1.5メートル前後の遺構検出面である。

柱穴・土坑を検出した。第3面の年代としては、12世紀後半頃を考えるのが妥当であろう。

#### 13号遺構 (Fig. 10, Fig. 11-1・2)

長辺110センチ、短辺70センチ、深さ18センチのややいびつな長方形を呈する土坑である。

土師器皿・壺（底部回転糸切り）、瓦器、白磁、青磁（同安窯系）、陶器、瓦、滑石鉢などが出土した。Fig. 11-1は土師器皿、2は筑前型瓦器碗である。12世紀後半の廃棄土坑であろう。

#### 20号遺構 (Fig. 11-3～7)

直径約54センチ、深さ14センチの略円形の柱穴である。

Fig. 11-3・4は瓦器碗である。3は和良型、4は筑前型で4の体部外面下半部には回転糸切り痕が残る。5・6は青磁碗である。7は口ハゲの白磁皿である。このほか土師器皿・壺（底部回転糸切り）・瓦質土器こね鉢が出土した。13世紀前半と見て大過なかろう。

#### 25号遺構 (Fig. 11-8～10)

直径約38センチ、深さ30.5センチの円形の柱穴である。

Fig. 11-8は、土師器皿（底部回転糸切り）である。内底部には、静止なで調整がなされる。9は口ハゲの白磁碗、10は青磁碗である。このほか陶器片などが出土した。13世紀前半であろう。

#### 35号遺構 (Fig. 11-11・12, Ph. 8-11・12)

1区南東壁にかかるて検出した土坑で、規模は知り得ない。深さは、15センチをはかる。

ほぼ完形の土師器壺2点が出土した。ともに回転糸切りする。11には内底部の静止なで調整と外底部の板目圧痕が見られるが、12には認められない。口径・器高はそれぞれ、12.3・2.7、12.6・2.7センチをはかる。このほか、青磁片、陶器片が出土している。13世紀前半頃の廃棄土坑であろうか。

#### 45号遺構 (=81号遺構) (Fig. 10, Fig. 11-18～25, Ph. 8-24)

長辺1.6メートル、短辺1.1メートル、深さ40センチのほぼ長方形を呈する土坑である。

Fig. 11-18は、土師器の壺である。回転糸切りで、内底部に静止なで調整を加える。口縁に油壺が付着する。口径12.2、器高2.45センチ。19～21は、白磁である。19は口縁端部を欠くが、口ハゲになる。21の高台内には、「錢」と墨書きされている。22は、龍泉窯系青磁の皿である。23は瓦質土器の搦り鉢である。外面は指押さえ、内面は刷毛目調整に搦り目を刻む。24は、滑石製のスタンプである。花文が見える。石鍋の転用である。25は、管状土錘である。この他、瓦器片、陶器片などが出土している。13世紀前半の廃棄土坑であろう。

### 60号遺構 (Fig. 11-13~17)

長軸1.54メートル、短軸1.04メートル、深さ26.5センチの不整形土坑である。

Fig. 11-13~15は、土師器の皿である。すべて底部は回転糸切りで、13・15の内底部には静止なで調整が加えられる。口径・器高は、それぞれ7.8・1.2、8.1・1.2、8.8・1.5センチをはかる。16・17は、白磁である。16は口ハゲの碗である。17も碗だが、見込みの釉を輪状に掻き取る。この他、陶器片が出土している。13世紀代の廃棄土坑であろう。

### 227号遺構 (Fig. 11-26~28)

直径50センチ前後、深さ19.5センチ程度の略円形の土坑もしくは柱穴である。

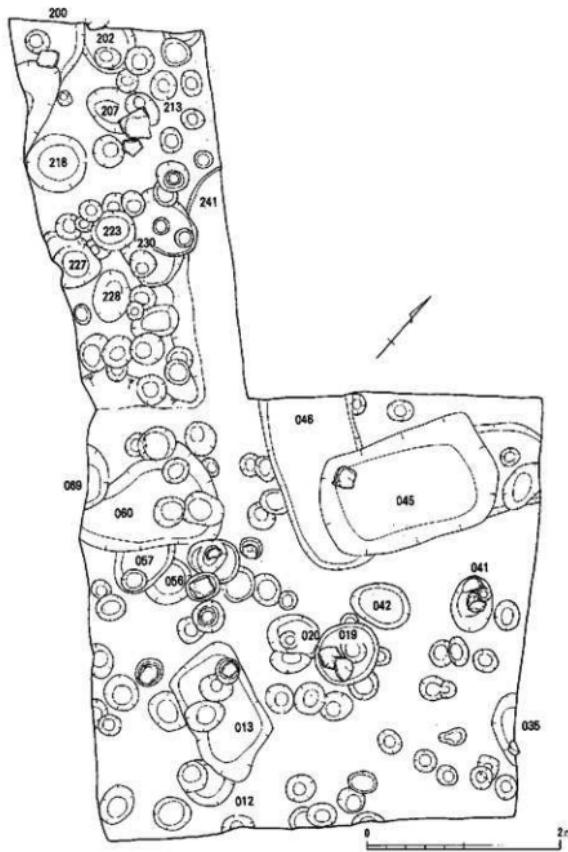


Fig. 9 第3面遺構全体図 (1/50)



Ph. 6 第3面 2区（南西より）



Ph. 7 第3面 1区（南西より）

土師器（底部へら切り）、瓦器、陶器、瓦などが出土した。図示したのは、瓦器碗である。26は、楠葉型で嵌入品である。27・28は筑前型で、単位のきわめて見ににくい幅広のへら磨きで平滑に仕上げる。12世紀後半の時期が与えられよう。

230号遺構 (Fig. 11-29・30)

さしわたし1メートル前後、深さ25センチ程度の、不整形の土坑である。

Fig. 11-29は、土師器の皿である。回転糸切りで、内底部を静止なで調整する。口径9.2、器高0.8センチをはかる。30は、同安窯系青磁の皿である。この他、龍泉窯系青磁皿、白磁、陶器、東播系須恵器、土鍋、鉄釘が出土した。12世紀後半の遺構である。

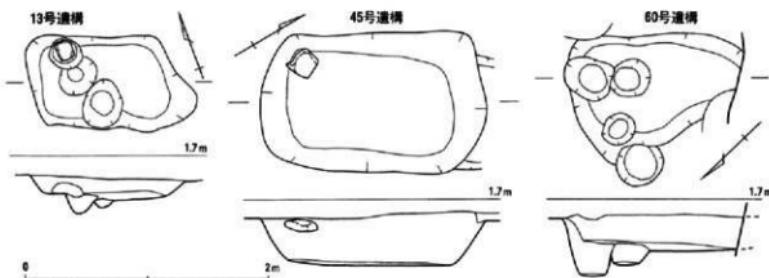
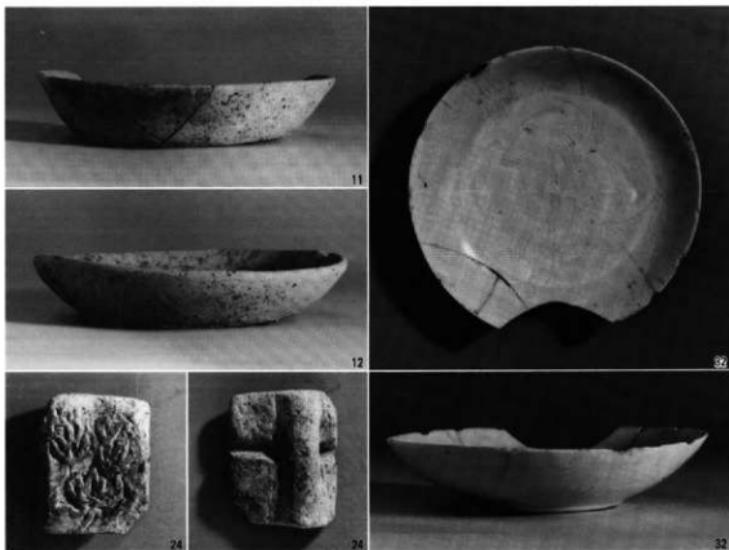


Fig. 10 13号・45号・60号遺構実測図 (1/40)



Ph. B 35・45・241号遺構出土遺物

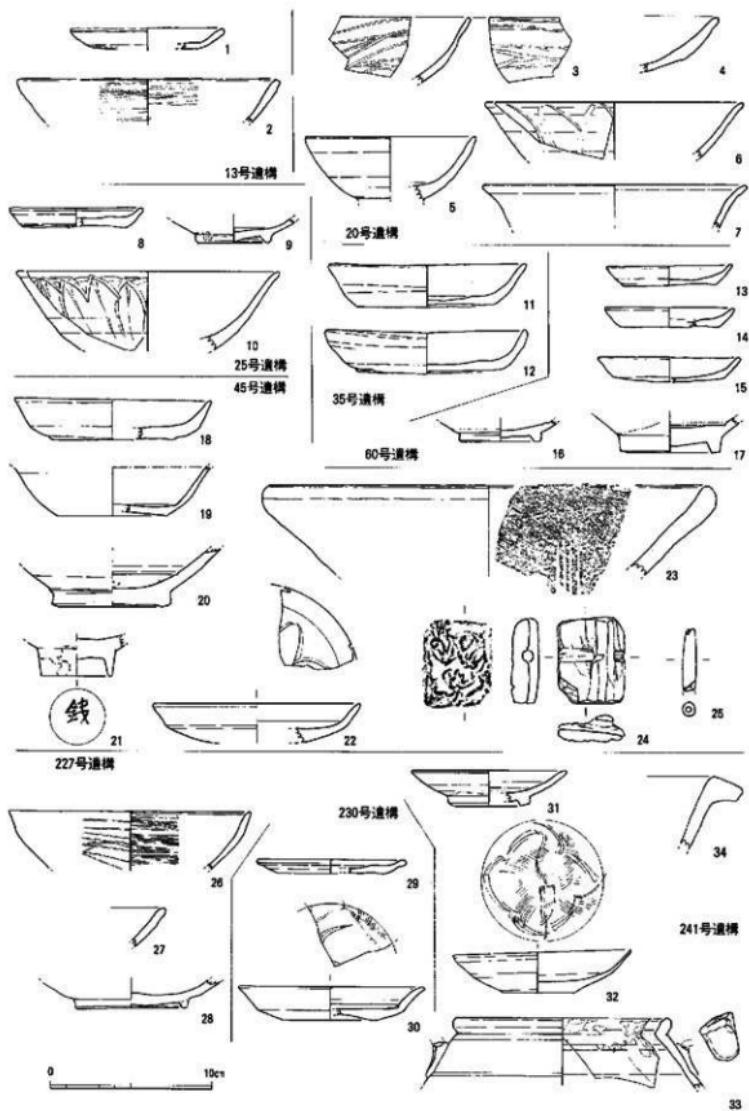


Fig. 11 第3面検出遺構出土遺物実測図 (1/3)

241号遺構 (Fig. 11-31~34, Ph. 8-31)

2区北東辺に沿うように検出した、深さ14センチほどの浅い落ち込みである。遺構として良いか不明で、あるいは包含層を落ち込み状に誤認しているかも知れない。

Fig. 11-31は、白磁の皿である。外底部は露胎で、見込みは輪状に胎を焼き取る。32は、青白磁の皿である。見込みには、描きで花文をあしらう。33は、陶器B群の短頸壺である。縦耳がおそらく4カ所につくものであろう。褐釉を薄く施す。34は、土鍋である。全面をなで調整する。この他、土師器小片、瓦片、石鍋破片などが出土している。12世紀後半から13世紀にかかる時期であろうか。

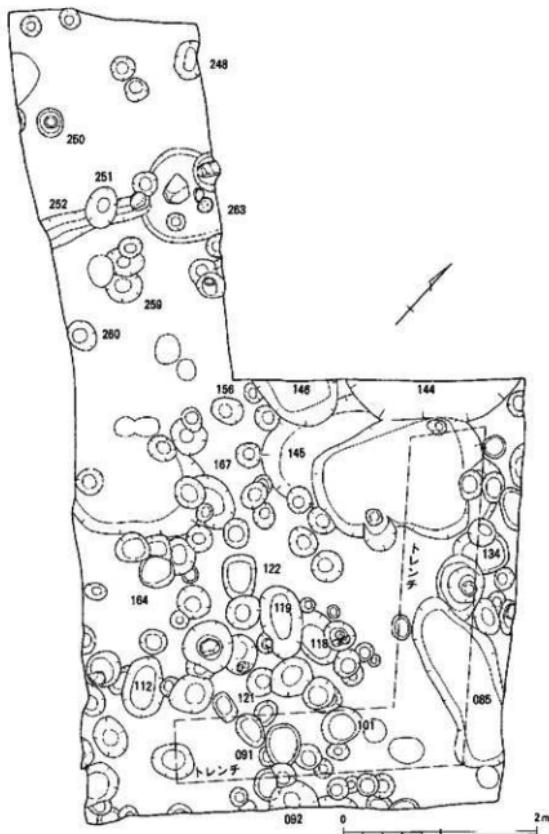


Fig. 12 第4面遺構全体図 (1/50)



Ph. 9 第4面 2区（南西より）



Ph. 10 第4面 1区（南西より）

(4) 第4面

1区第2面、2区第4面に当たる。第3面から10~20センチ程掘り下げた、標高1.2~1.4メートルの遺構検出面である。1区が2区より若干高まっている。

柱穴・土坑・溝を検出した。次節で述べる第4面の下の砂層の形成年代からみて、第4面の年代としては、12世紀前半頃を考えるのが妥当であろう。

85号遺構 (Fig. 13, Fig. 14-1)

1区北東壁に一部がかかって検出した土坑である。長軸1.9メートル、短軸0.76メートル、深さ28センチの長楕円形を呈する。

土師器（底部へら切り）、白磁碗、須恵器片が出土した。図化できたのは、Fig. 14-1に示した白磁碗のみである。12世紀前半の廐棄土坑である。

91号遺構 (Fig. 14-2~5)

直径34センチ、深さ40センチの略円形を呈する柱穴である。

出土遺物の一部を、Fig. 14に示す。2は、土師器の壺である。底部は回転糸切りで、内底部には静止なで調整を加える。口径16.1センチ、器高3.0センチをはかる。3は、瓦器碗である。筑前型で、単位の不明瞭な幅広のへら磨きを施す。4は、黒色土器B類の碗である。内外とも、密に分割へら磨きを行う。5は、白磁の皿である。見込みに片切り彫りで花文を描く。この他、龍泉窯系青磁皿が出土した。12世紀後半に属する。

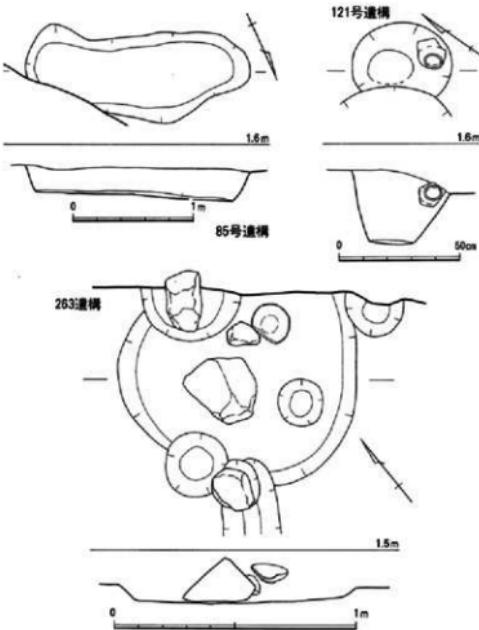
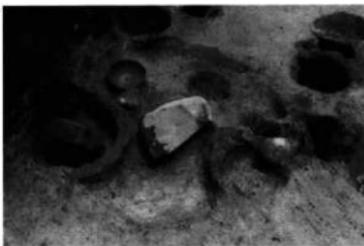


Fig. 13 85号・121号・263号遺構実測図 (1/40, 1/20)



Ph. 11 121号遺構瓦器碗出土状況（西より）



Ph. 12 263号遺構瓦器碗出土状況（西より）

121号遺構 (Fig. 13, Fig. 14-6, Ph. 11)

直徑84センチ、深さ62センチの柱穴である。掘り方の壁に接して、瓦器碗が出土した。

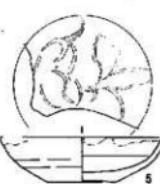
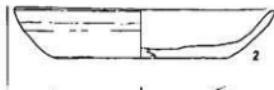
Fig. 14-6に図示したのがそれで、筑前型の瓦器碗である。へら磨きの単位は見にくいが、幅広のへら磨きで、内外面とも密に分割へら磨きする。12世紀前半であろう。

144号遺構 (Fig. 14-7~21)

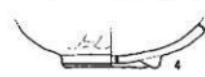
1区の北東壁にかかる掘り方の一部を検出した井戸である。大部分が調査区外となるため、井筒の構造などは知り得ない。

出土遺物の一部をFig. 14-7~21に示す。7は、土師器の皿である。底部は回転糸切りで、内底部は静止なで調整する。ひずみがあり、口径8.8~9.0センチ、器高0.8センチをはかる。8~10は、青磁で

85号遺構



121号遺構



91号遺構

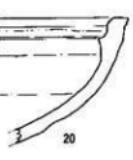
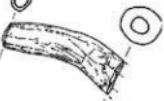
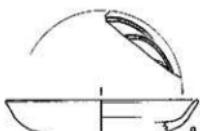
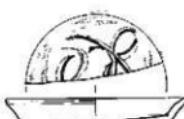
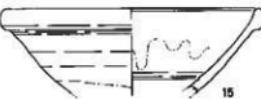


Fig. 14 85号・91号・121号・144号遺構出土遺物実測図 (1/3)

ある。8は同安窯系、9・10は龍泉窯系青磁である。11～17は、白磁である。13の見込みには釉がかからず、露胎となる。18～21は、陶器である。18・19・21は褐釉、20は灰釉を施す。20はこね鉢である。21は摺り鉢であるが、使用により摩耗している。この他、瓦器碗（楠葉型・筑前型）、土鍋などが出土した。12世紀後半の井戸と考えられる。

#### 145号遺構 (Fig. 15-1～3)

45号遺構、144号遺構に切られた土坑である。長軸で1.4メートル以上、深さ17.8センチをはかる。

Fig. 15-1は、青白磁の小壺である。外底部は露胎、口縁は釉を削り取る。2は、龍泉窯系の青磁皿である。3は陶器B群の瓶で、茶オリーブ釉を施す。外底部には、灰白色の砂目がつく。この他、壁土塊が出土している。12世紀後半の廃棄土坑であろう。

#### 262号遺構 (Fig. 15-4～9)

検出面での幅31センチ、深さ11.5センチの溝である。次に述べる263号遺構に切られる。

Fig. 15-4・8は、土師器である。4は器形ははっきりしないが、鏡であろうか。内面はなで調整、外面は刷毛目調整する。8は、甕であろう。口縁部は横なで、体部は刷毛目調整で、内面はそれになで調整を加える。5～7は、瓦器である。5・6は筑前型の碗で、5の外面は間を開けた横へら磨き、内面は単位の見ににくい幅広のへら磨きを密に施して平滑に整える。6の内面は、こて当てで平滑にした上に、幅広のへら磨きを粗く行う。7は、楠葉型の皿である。9は、砂岩製の毬球玉である。全面を叩打し、球形に成形する。この他、白磁、石鍋が出土した。12世紀前半と考えられる。

#### 263号遺構 (Fig. 13、Fig. 15-10、Ph. 12)

一部が2区北東壁にかかる調査区外に出るが、直径2メートル程度、検出面からの深さ16センチ

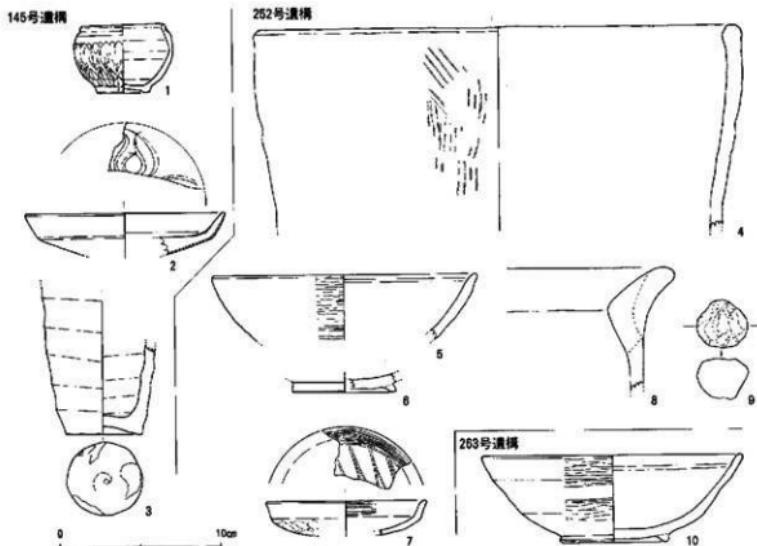


Fig. 15 145号・252号・263号遺構出土遺物実測図 (1/3)

をはかる略円形の土坑である。

土師器（底部へら切り・回転糸切り）、瓦器（筑前型）、白磁が出土した。瓦器は4点出土しているが、完形に近いものをFig. 15-10に図示した。外面は、横へら磨きを部分的に密に行う。内面は、こてを当てた後、全体に大きなジグザグへら磨きを加える。12世紀前半の廃棄土坑と考える。

#### （5）第4面下包含層の出土遺物

既に述べたように、今回の調査では旧地形復元の手がかりを得るために、第4面終了後にトレンチを設定した。また、2区については、第4面以下について遺物を得るために掘り下げを行った。

これらの出土遺物は、本調査地点での旧河川埋没および生活面創設の時期を探る上で重要と思われる、Fig. 16に図示することとする。

Fig. 16-1～5、10、13は、瓦器である。1は和泉型、10は筑前型で、他は楠葉型に属する。6は在地の土師器碗、11・14～16は白磁、17・18は東播系須恵器の鉢である。7・8・12は土錘、9は石錘を転

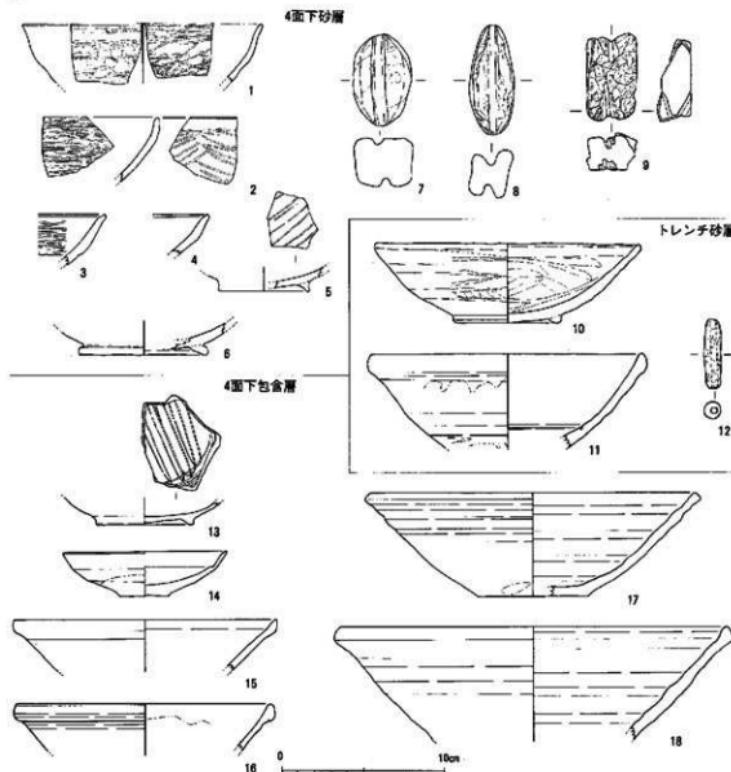


Fig. 16 第4面下包含層出土遺物実測図 (1/3)

用した滑石の石錘である。この他、土師器（底部へら切り・回転糸切り）、越州窯系青磁片、東濃産綠釉陶器片などが出土している。これらの遺物で比較的後出する要素を持つのは、1の和泉型瓦器碗、2の楠葉型瓦器碗、18の東播系須恵器鉢、回転糸切りの土師器などである。これらを考慮にいれた上で、第4面下包含層の最終時期を12世紀前半におきたい。

#### (6) その他の出土遺物

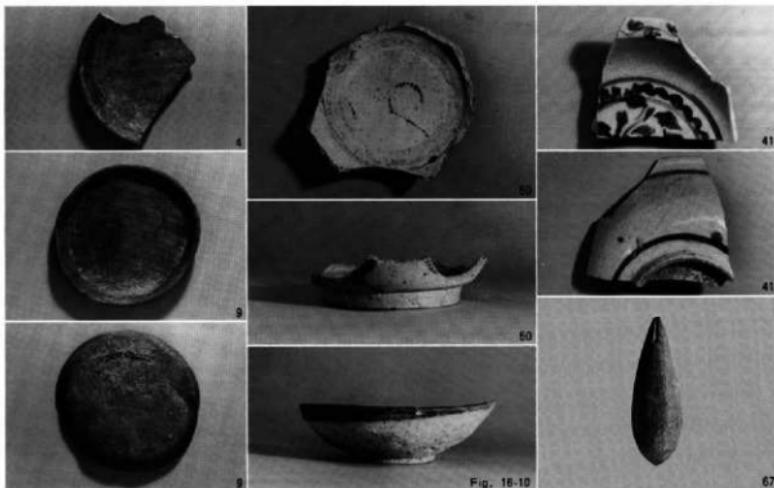
これまでの報告から漏れた出土遺物から、図化できた若干をFig. 17~20に紹介する。

1~20は、瓦器である。1~10は楠葉型の皿、12~14は楠葉型の碗である。本調査では、博多遺跡群のこれまでの調査地点に比べて、12・13さらにFig. 11-26のような楠葉型第2期に属する資料が多くみられる点が注目される。11は、和泉型である。15~20は、筑前型である。17は、器壁の厚さが薄く均一で、他の筑前型の碗とはそぐわないが、外底部に板目压痕をとどめており、回転台使用による成形と思われる。16も薄手で、鋭い作りである。

21は、東播系須恵器の鉢である。22は、土師質土器の鉢である。焼成は、非常に良好である。内面はなで調整、外面は指押さえする。外底部は、へら状の工具で強くなっている。23は、瀬戸陶器の入子皿である。底部には、糸切り痕が残る。

24~26は、青磁である。24は、高台の内側を輪状に釉剥ぎする。27は、青白磁の小壺の蓋である。28~40は、白磁である。41~43は、染付である。41は瑠璃窯系で、いわゆる「スワート」の鉢である。外底部と高台には、目砂が付着している。44~47は、褐釉陶器である。44は茶入れで、口縁の内面から全体外面に黒褐色の釉をかける。45は、黒釉の天目茶碗である。46は、陶器B群の短頸瓶で、小さな耳がつくタイプであろう。47は、陶器C群の鉢である。口縁上面に、灰褐色の胎土目が見られる。

48~49は、朝鮮王朝陶磁器である。48は陶器の皿で、白土を象嵌する。49は白磁碗である。豊付き



Ph. 13 その他の出土遺物

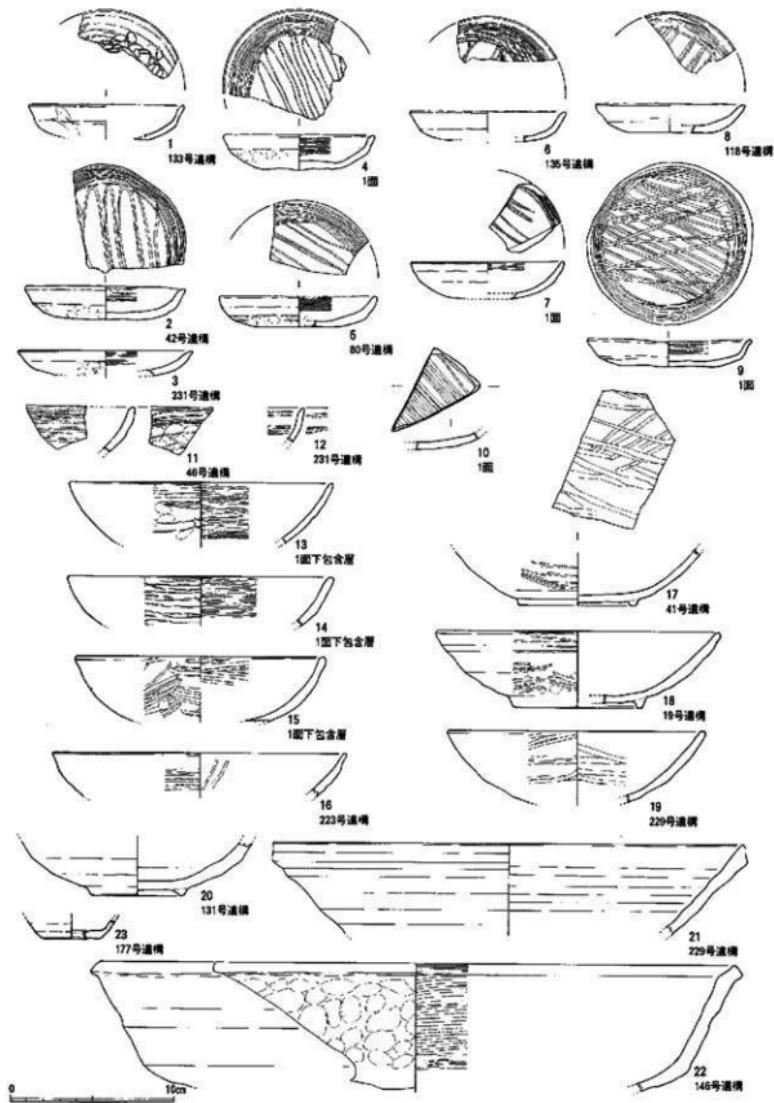


Fig. 17 その他の出土遺物実測図 1 (1/3)

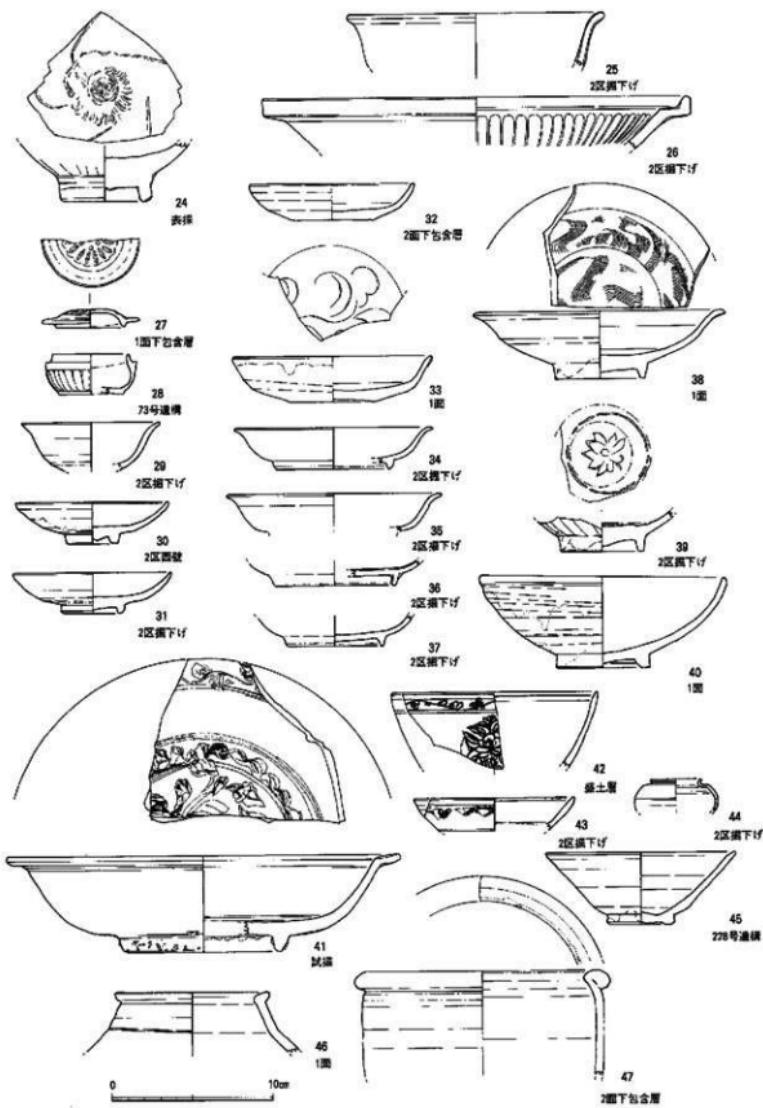


Fig. 18 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)

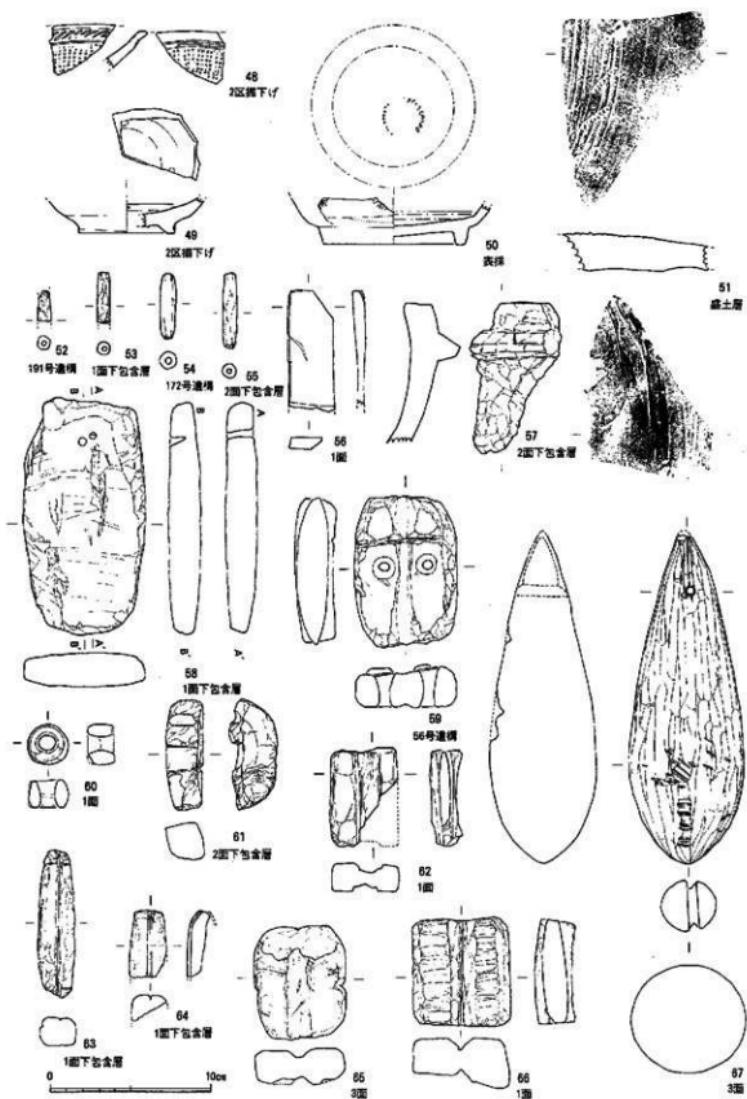


Fig. 19 その他の出土遺物実測図 3 (1/3)

は露胎で、見込みには目痕が並ぶ。50は、ベトナム陶器の鉢である。白色の釉をかけ、見込みは輪状に釉剥ぎする。体部外面と見込みに、輪状花文を鉄釉でスタンプする。51は、タイの焼締陶器の蓋である。肩部の破片と思われ、平行沈線文による擣状工具による刺突文が並ぶ。

52~55は、管状土錐である。

56~67は、石製品である。56は粘板岩の砥石で、目が細かく仕上げ砥であろう。57は、滑石の石錐である。58はこの形で完形品で、中央の端よりに穿孔する。孔は二ヶ所有るが、一方は貫通していない。59・62~67は、滑石製の石錐である。67以外は、石錐片を再加工したものと見られる。60は滑石製の玉である。61は、滑石の不明石製品である。石錐片を転用したもので、折れているため本来の形状がわからない。上部には、穿孔がある。

Fig. 20には、出土銭を示す。今回の発掘調査では、わずかに4枚の銅銭が出土したにとどまった。すべて解読することができた。いずれも北宋銭であるが、出土層位は浅い。



Fig. 20 出土銅銭拓本 (1/1)

### 第三章　まとめ

博多遺跡群第98次調査の概要報告を終えるにあたって、ささやかなまとめと、若干の問題提起を試みたい。

まず、簡単に調査成果をまとめておく。本調査地点での最も遡る遺構は、12世紀前半に属する。なお、最下層検査面の基盤は、12世紀前半の遺物を含む砂層であり、基盤砂層の堆積後間もなくして生活が開始されたことがうかがわれる。遺構が密度を増すのは、12世紀後半から13世紀前半にかかる時期である。この段階で、本格的に都市化したものと推測される。その後生活は継続しているが、今回は14世紀とした第1面以下についてしか調査していない。その上位は、既存建物による擾乱などの掘り込みが激しかったが、遺構が存在したことに疑う余地はない。

さて、次に遺構が営まれる以前の地形環境について、考察したい。これまでの博多遺跡群の発掘調査から、次の点が明らかとなってきた。すなわち、博多遺跡群は、博多湾岸に形成された数列の砂丘上に乗っており、歴史的には最も博多湾側の砂丘「息浜」と内側の博多浜にくくることができる。「息浜」と博多浜の間には、古墳時代以後南西側から北東に向けて川が流れ込んでいた。「息浜」はこの川の左岸（博多湾側）に形成されたもので、弥生時代以来集落が営まれていた博多浜と違って、遺構の進出は遅れていた。博多浜は、11世紀後半には宋商人の居所となり、日宋貿易の窓口として都市化していた。「息浜」では、遺構の初源こそ11世紀後半まで遡るが、都市化するのは13世紀代まで遅

表1 中世土器・陶磁器組成表

輸入陶磁器				国産土器・陶器			
種類	出土点数	輸入陶磁器の合計に対する%	出土点数の総計に対する%	種類	出土点数	国産土器の合計に対する%	出土点数の総計に対する%
白 磁	414	40.3	12.0	土師器・皿	1495	62.1	43.5
青 磁	193	18.8	5.6	土師器雜器	229	9.5	6.7
陶 器	356	34.7	10.4	瓦器・皿	374	15.5	10.9
青白磁	18	1.8	0.5	黑色土器	9	0.4	0.3
天 目	5	0.5	0.1	須恵質陶器	99	4.1	2.9
明 染付	24	2.3	0.7	瓦質土器	30	1.2	0.9
朝 鮮	13	1.3	0.4	陶 器	61	2.5	1.8
そ の 他	4	0.4	0.1	瓦	112	4.6	3.3
合 計	1027	100	29.9	合 計	2409	100	70.1
總 計	3436						

表2 輸入陶磁器時期別出土点数

時期	白磁	青磁	明染付	朝鮮	合計
10~11C.	1	1			2
11~12C.	343			3	346
12~13C.	8	123			131
13~14C.	25	52			77
14~15C.	14	8	1		23
15~16C.	20	7	23	10	60
不 明	2	2			4

表3 瓦器類型別出土点数

類型	碗	皿	合計	%
筑前型	298	3	301	80.5
福葉型	43	18	61	16.3
和泉型	10	2	12	3.2
合計	351	23	374	100

れる。この間、遅くとも11世紀代には河川は流れを変え、12世紀初頭前後には博多浜と「息浜」との間を結ぶ埋立が行われ、両者は陸続きとなった。その後、砂丘間の低地は湿地としてその姿をとどめ、小規模な埋立は行われたものの、完全にこれを埋め立てて一連の町場となるのは、近世初頭を待たなくてはならない。

このような流れを前提として第98次調査地点を見ると、基盤砂層以下が河川の河口部近くの堆積砂であり、自然堆積であることが注目される。基盤砂層上部には薄くはあるが泥炭層も生成しており、河川が埋没した後、一時湿地を呈していたことが知られる。その上に砂丘性の砂層が薄く乗り、遺構はその上から掘り込まれていた。つまり、人為的な埋立はなされていないのである。これを上述の既往の成果と合わせると、砂丘間を流れていた川がその流れをかえ、陸橋状の埋立がなされると、一気に低地の堆積が進み湿地を呈するまでになった。程なく、その上に風成砂などの砂丘性の砂がたまり、人々の生活の場として利用できるようになったと思われる。この地点の都市化が、12世紀後半から13世紀にかかる時期と、「息浜」の他の地点より早いのは、ここが陸橋を渡ってすぐの地点であることと、「息浜」の内陸側斜面に当たっており、博多湾からの直接の風涛を受けなかつたという立地条件によるのであろう。

紙面の余裕が尽きてきたので、遺物についても触れておかなくてはならない。本調査における出土資料は、博多遺跡群としては比較的少なく、土器・陶磁器については、そのすべてを数え上げることができた。表1~3にその内訳を示す。上述したように、博多遺跡群としてはいわば特殊な立地を示す地点であり、この傾向が博多遺跡群全体に敷衍できるものではないが、参考資料、他地点との比較資料として報告する意義はあろうと考える。なお、瓦器において畿内からの搬入品が目立ったので、その内訳も示した。いずれ本調査地点の「場」的特質を考える上で役立とうと愚考する次第である。

## 博多 64

— 博多遺跡群第98次調査の概要 —  
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第559集

1998年3月31日発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 弘文社印刷株式会社

福岡市博多区住吉3-8-17